

(158) 栃木県那須塩原の三斗小屋銀山跡

実は、三斗小屋鉱山の探査結果については、本探査記の項（146）で紹介済みであった。参考文献（1）を手引きに探査した金山沢付近にある、この鉱山の主要産出鉱物は銅であった。

が、この文献の末尾に、添付資料（1）のような文章があることは気にかけていた。「三斗小屋部落の北方の沢に、明治以前に稼業された銀山の崩壊した坑口がある」。前記の通りの「銅鉱山」としての三斗小屋鉱山は、部落の西南方向に位置しているのは確認済みである。つまり既探査の三斗小屋鉱山とは産出鉱物が全く異なっていた鉱山が、三斗小屋宿近傍にあったということである。当初同じ位置の鉱山であり、産出鉱物が時期によって違っていたのかも知れないと思っていた。が、少しは気にはなっていた。

三斗小屋「銀」鉱山について、幾つかの文献を当たった。参考文献（2）には、「三斗小屋銀銅鉱山」としての解説があった。原文の脈絡が良く理解できないところもあったが、三斗小屋部落付近には位置は記されていないが、銀鉱山があり、旧坑で崩落しているとのこと。参考文献（3）で「第13節 三斗小屋銀山」としての解説を見つけた。その銀山の位置については、「・・・三斗小屋なる温泉の西方に銀山がある。・・・」これだけである。現在の地形図を見ると、「三斗小屋温泉」の西方に「三斗小屋宿（部落）」がある。温泉の西方だけの記述では、大雑把すぎる。どうも参考文献（1）の方が、位置情報はより確かなようである。参考文献（4）には「三斗小屋銅山」だけについての記述はある。銀鉱山については触れていない。さらに、参考文献（5）では、後書きで「三斗小屋銀山」についての記述があるが、内容は参考文献（3）の転記であった。

以上をもとに出した結論は次の通りである。三斗小屋宿近傍には「銅山」と「銀山」があった。「銅山」は宿の西南方向にあり、著者の既探査の鉱山である。「銀山」は宿の北の井戸沢沿いにあると推断した。そして、現地探査に岩友と出かけた。井戸沢での沢の転石を観察することを主目的として。上流に鉱山があれば、その金属含有転石があるはずとの推断からである。

東北道から三斗小屋宿への経路の説明は本探査記の項（146）三斗小屋鉱山に記載しているのでそれに譲る。林道をゲートから徒歩で登っていたとき、下って来る車に出会った。運転していた方と話しをすることができた。何と、昔に三斗小屋に住んでいたという方あった。「銀山」について伺うと、「井戸沢を300m程上がった左手（沢の右岸）の林の中にあつたらしい。大分昔のものであり、今では草木に埋もれて、わからないかも。」とのこと。感謝、感謝である。結果論であるが、この型からの情報が最も信頼できたものであった。ついでに、この林道を一般車通行禁止にしている理由について伺った。この林道が通行可となれば、三斗小屋温泉へのアクセスが容易になり、客が増えると思っていたので。以前は通行可であったが、到来者が事故を起こし、道路の管理者が訴えられ、裁判沙汰になったためとか。

明瞭に「銀山」の言葉、それに大凡の位置情報を手に入れた。井戸沢出合いあたりから沢を遡り、砂防ダムの上流まで探査後、沢の右岸斜面に留意しながら下り、ダムの右端の所から右岸の山林中に入り、下りながら探査をした。山林一帯は濃い熊笹が生い茂っていたが、それを掻き分け掻き分けて進んだ。突然、熊笹が全く生えていない「空き地」にでた。全く奇妙な光景であった。空き地の周りには熊笹が生い茂っているのに、ここの領域だけ全く熊笹がないのである。下草もなく、ただゴロゴロした石の上を厚く苔が覆っている。中央あたりに岩に根を張って古木が1本だけ伸びている。注意深く地面を観察すると、何カ所からの岩石の間から冷風が吹き出している。富士山の風穴を思い出した。懐中電灯で岩の隙間の間を照らして見たが、岩石に阻まれて奥を見通すことはできなかった。が、ここが「坑口が崩壊した銀山」跡だと確信した。周りも広く探査し、適当な標本も採集したかったが、ここからの下山経路は未だ未確定であり、時間も遅くなっており、今回はここでまでとした。

是非とも再探査をしたい鉱山跡である。次回にはそれなりの標本を採集したい。耳学問によると、いわゆる「銀鉱山」では、鉛をよく産出し、その中に残っている銀を抽出する（灰吹き法等）場合が多いとか。ということは、方鉛鉱に主眼を置いて探すのが良いのかも知れない。

現地に達するには、熊笹の藪こぎをしなければならない。熊笹を切り除く道具が必須である。鎌が良さそう。現在、水道路から現地に至る道はない。ガーミンと図3を参考にして、赤丸の所までの道を切り開く必要がある。ルートが確定すれば、周りの探査に気を向ける余裕もできよう。

折角、三斗小屋に行くならば、ここで紹介している井戸沢にある銀山だけではなく、（146）で紹介している金山沢にある銅山も訪問したいかも知れない。訪問の時間と体力があれば、容易に日程は組めよう。が、最初に、銀山の方を訪問することを勧める。銀山を訪れ、（146）の経路ログを参考にしながら宿から西方にある銅山へ行く。が、鞍部までは道はないので、やはり熊笹を掻き分けることになろう。銅山を訪問後、金山沢を下るという経路である。

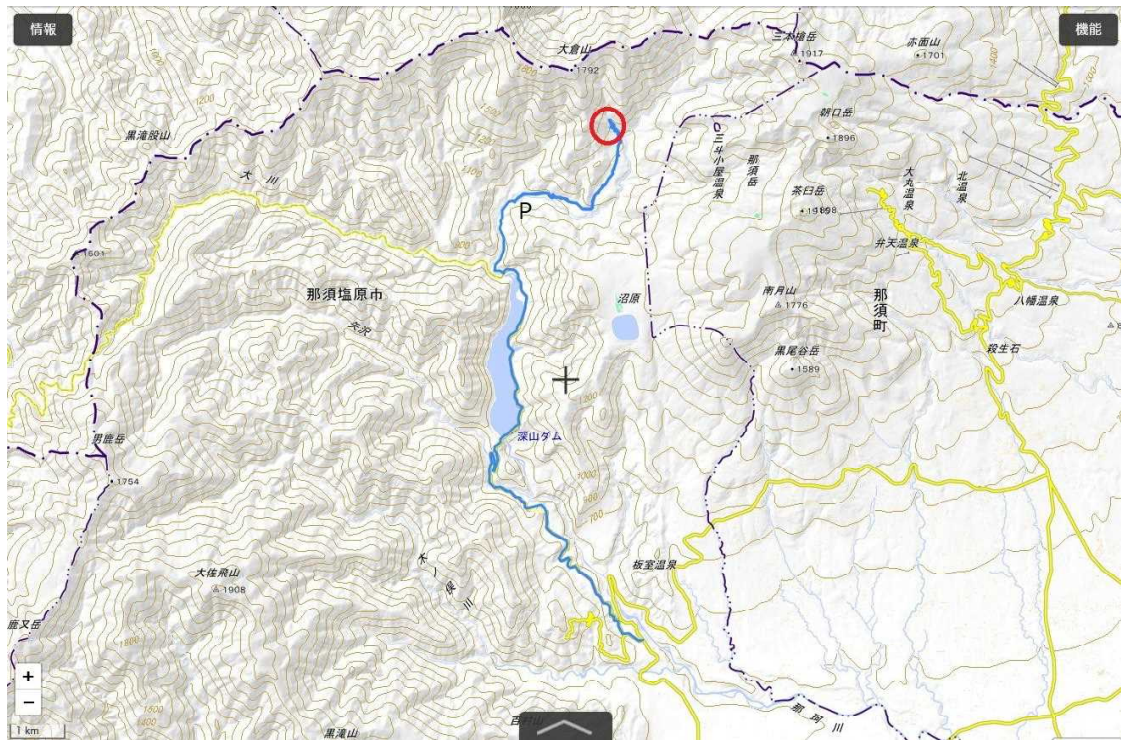


図1 板室温泉からの、ガーミンで測地した経路を青色曲線で描いている。三斗小屋までの経路は本探査記の(146)三斗小屋鉦山跡を参照のこと。P点付近にゲートがあり、ここから徒歩となる。赤丸が現地。

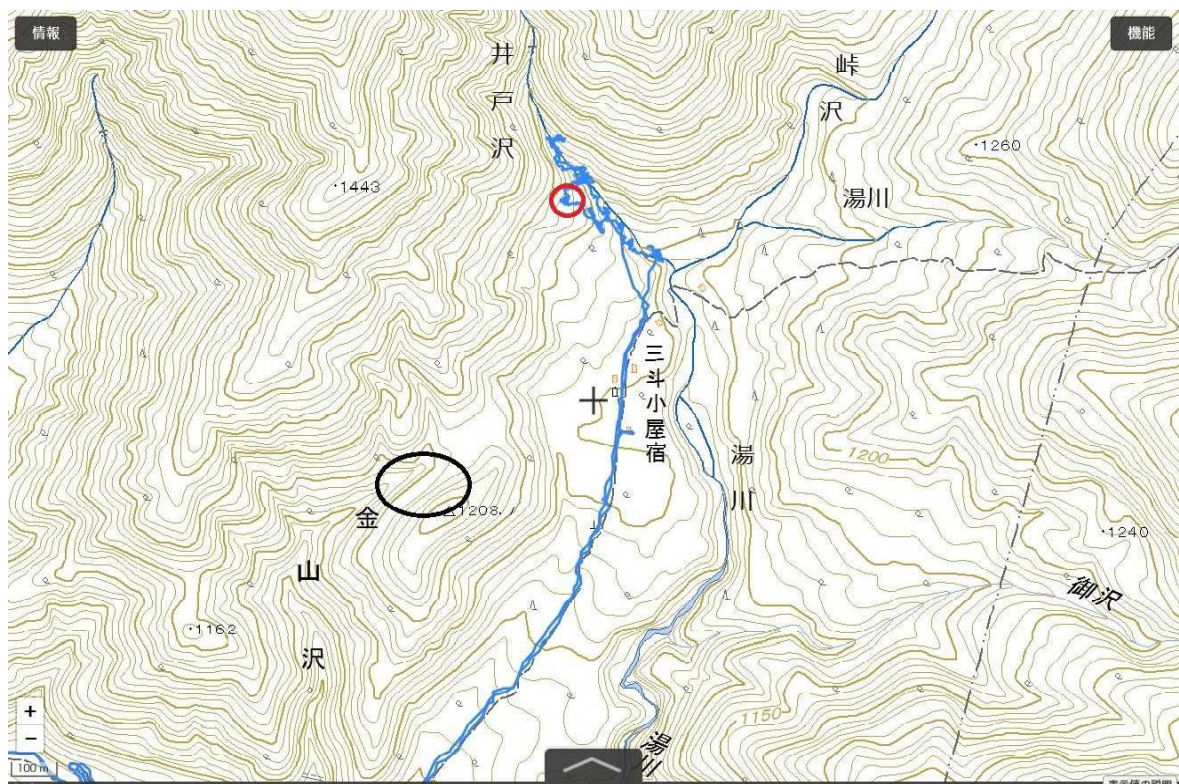


図2 図1の部分拡大図。今回の「三斗小屋銀鉦山」跡の位置は赤丸。既探査である「三斗小屋(銅)鉦山」跡の位置を黒丸で示している。そう言えば、金山沢から三角点の所までの斜面で熊笹の藪こぎを強いられたことを思い出した。この当たり一帯は熊笹が良く育っている。

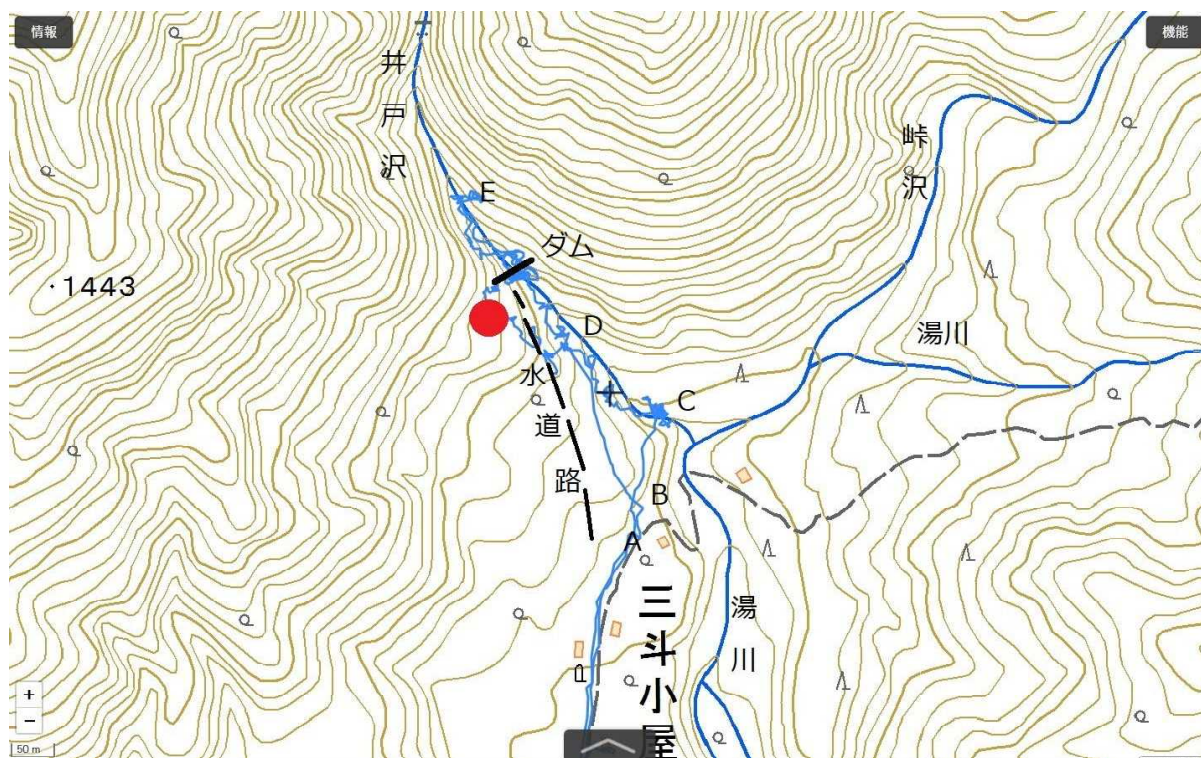


図3 更なる部分拡大図。赤円が現地。A点は分岐点で、右は三斗小屋温泉への道。ここは左とする。直ぐに分岐点Bとなる。右側に細い参道が延びている、昔の「会津西街道」である。こちらへ進むと、井戸沢出口のC点に行く。BからDは結構幅広の林道である。ダム近くまでは伸びていそう。が、未確認。今回の登りの経路はA→B→C→D→ダム→E。ダムは右岸端から登れようが、次回以降は無理にダムを登り上げる必要はないかも。その後、砂防ダムの右岸部分から山斜面へ熊笹を分け入り、赤円に達した。その後、斜面を下り、水道路に降り、そこから、林道のD点に降り、D→B→Aの経路で下山した。

鉱山跡写真

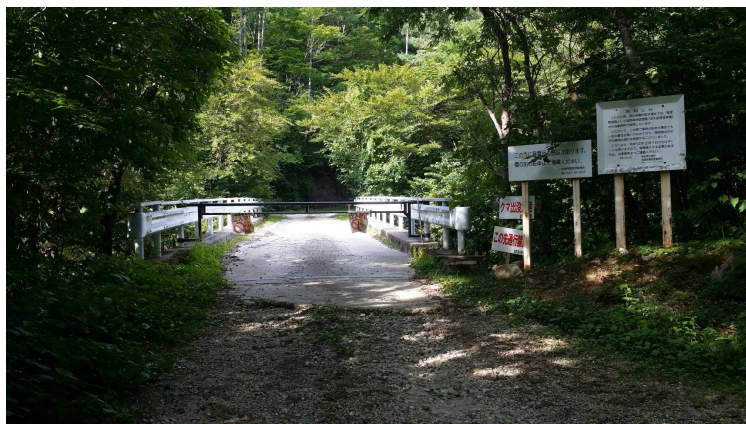


写真1 深山ダムを過ぎ、林道を先へと進んでいく。橋の上にあるゲートが閉じている。一般車の通行禁止。ここから歩く。結構歩くが、路は山道としては優良である。



写真2 図3のA点。右側の道を進むと、湯川を渡り、三斗小屋温泉へ。左側の道が井戸沢方向へ。車はこの地域の関係者のもの、一般車は入ってこれない。



写真3 図3のB点。右側の消えてしまいそうな山道が会津へのかつての主要街道であった会津西街道。左側の広い林道は図3のD点より先に伸びている。

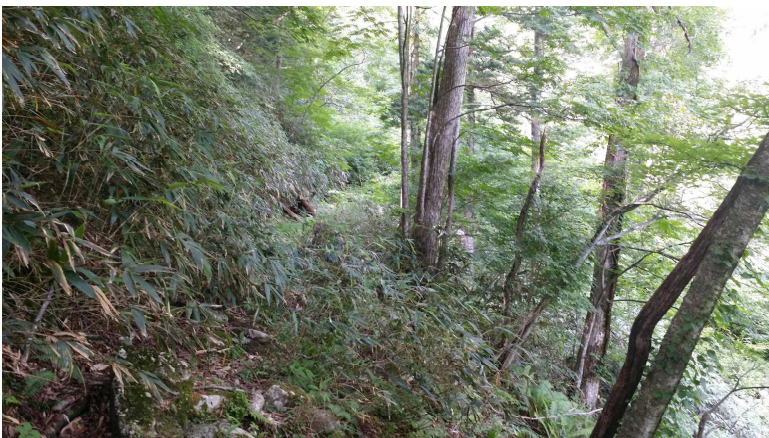


写真4 図3のD点から右岸の少し上部近傍。つまり、林道より右岸側に少し登った所の水道路の箇所。そう言えば、上流のダム直下に取水口があった。三斗小屋への水道路と判断した。赤丸で示している現地から下り、再び熊笹の藪こぎをして、この付近に降り立った。



写真5 赤丸で示した現地の空き地の中央付近。凡そ10m四方部分だけ全く熊笹が生えていなかった、「奇妙な裸地」であった。苔が厚く覆ったごろごろの岩に根を張って太い木が1本だけ育っていた。その木の根元。周りの岩石の間の暗い所々から冷気が吹き出していた。奥に長く大きな空間（坑道等）があるはず！



写真6 写真5を別角度から撮影。木の根がたこの足のように岩石に抱きついている。全体の状況から、江戸時代に採掘が行われた「坑口の崩壊した銀鉱山」跡と判断した。

採集鉱物写真

なし。次回を期待している。

参考文献

(1)「地下資源調査報告書 第2号」、栃木県、昭和28年？。

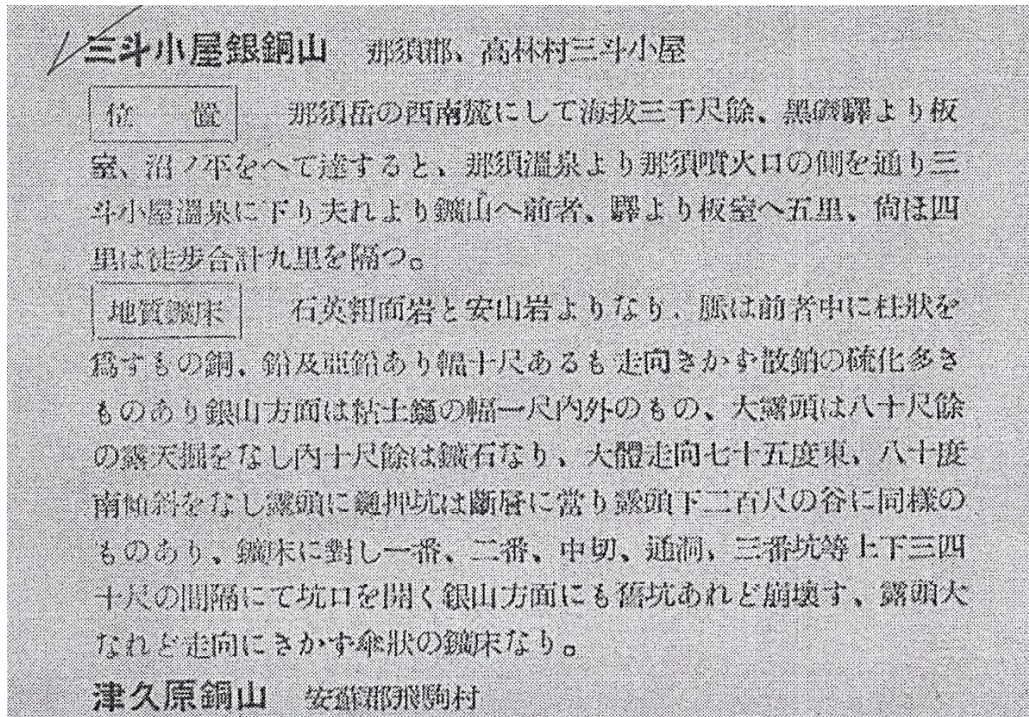
6. 結 語

当鉱山の鉱床は、高品位を示す露頭と低品位鉱石からなる脈状のものとなる。前者のうち旧1号露頭はすでにその規模はほぼわかっているが、新不動坑および本坑の露頭は方向性および規模も不明であるから、まず露頭を直接探鉱し鉱床の実体を把握しつゝ出鉱することが必要である。また本坑内には断層にそつた鉱脈状のものもあるし、他では見られない粘土化帯を伴うので、鉱脈状のものも追跡する必要があると考えられる。

石英粗面岩以外のものの中では花崗岩中の鉱床が知られている。三斗小屋部落北方の沢には明治維新以前に銀山として稼行されたといわれ、崩壊した坑口があるが、この附近は花崗岩の節理にそつてやゝ粘土化作用が行われているにすぎない。この地点を除き従来この地域の花崗岩中には鉱床の賦存が知られていないことから、石英粗面岩以外のものが鉱床の母岩となる可能性は少ないものと思われる。

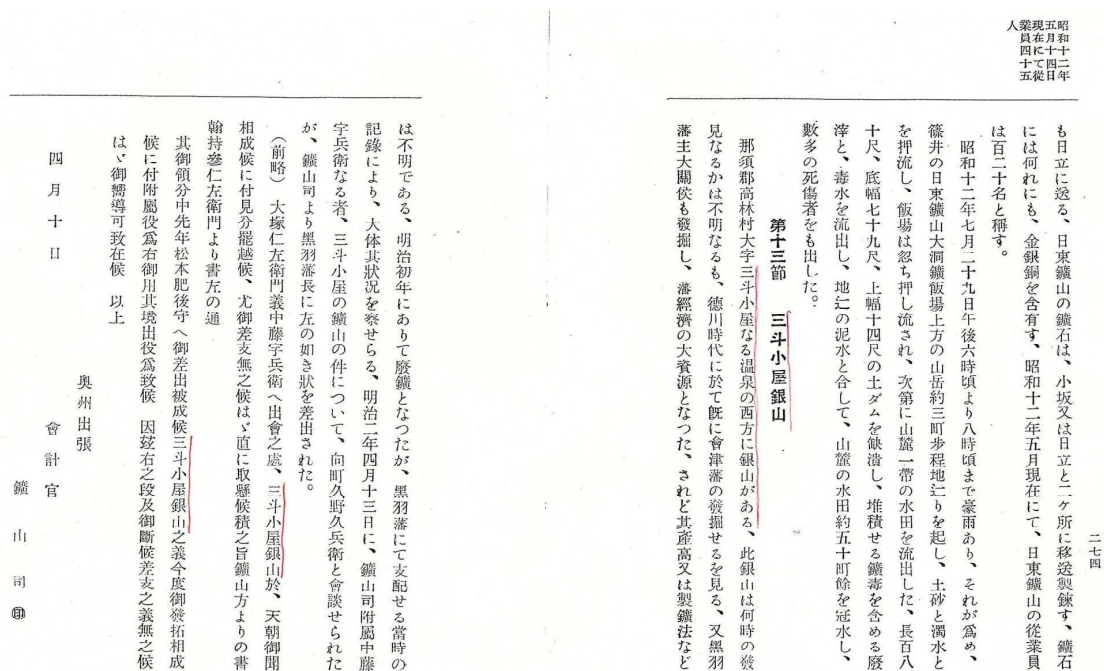
添付資料1「地下資源調査報告書 第2号」の「三斗小屋鉱山」の項の文末

(2)「東京鉱山監督局管内 金属鉱山」、小山一郎、大阪鉱業社、昭和15年。



添付資料2 「東京鉱山監督局管内 金属鉱山」の「三斗小屋銀銅山」の項

(3)「栃木県史 第十巻 産業経済編」、田代善吉、臨川書店、昭和8年。



黒羽藩長官御中

右に付 仁左衛門又々候 淺草阿都川町本牧屋表三郎と申者へ百日之試掘任せ置候得共外に差支筋無之段爲及符候日又松平肥後守へ差出候義一切無之旨申談候様申談尙銀山司へ返書左の通り遣し候

御書翰拜見仕候然者當領分三斗小屋銀山今度御發給相成候ニ付御附屬御役方右爲御用御出役被仰付因茲差支無之者御駕導可仕御頼被仰越故承知候得共山方之義深心得候者無御座候委細之義は此度御出役之方へ向役之者差出御相談爲仕候 此段爲御請知此御座候 恐惶謹言

五月女三左衛門判

會計官

銀山司御役所

追而本文銀山松平肥後へ差出候趣被仰下候得共差出候義一切無御座候 委細之義は中藤字兵衛殿へ爲御相談候間左様御承知可被成候 以上

中藤字兵衛同道の上三斗小屋へ出張致すべく様鈴木武兵衛へ民政司より通知すべしこととす。

四月二十九日の書面によれば左の如し。

清水喜左衛門者に付三斗小屋銀山 天朝にて御開山相成候間右山に付故殿之義無之段御請致置候 此段其元最初取掛居候間爲心得相違且つ武兵衛へ篤と吞込せ置候旨仁左衛門中間御領内高敷瀬沼房之助へ及沙汰云々

此等古文書によれば、三斗小屋銀山は明治初年の發見開鑿の様なれども、徳川中世に既に採鑛されたものらしい。

第十四節 大谷石材

河内郡城山村寛針附近から無盡蔵とも云ふべき石材が埋没してある、未等の岩質は凝灰角礫岩と稱するもので、概して塊狀を爲して層理は殆んどない、圖本村より登野村長岡よりも多少發掘せらるるも、城山村産のものと比較すれば脆弱の處がある、主として城山村より産出するを大谷石材と稱する。

添付資料 3 「栃木県史 第十卷 産業經濟編」の「三斗小屋銀山」の項

- (4) 「三斗小屋温泉誌」、三斗小屋温泉誌刊行委員会編、編集工房随想者、1989年。
 (5) 「三斗小屋誌」、田代音吉、宇都宮／下野史談会、1984年。